



草壁ふみこ

---

---

花園子爵の娘・晴子は、「翡翠窓の乙女」と呼ばれている。それは、彼女が図書室の窓際、翡翠色のステンドグラスの光が落ちる場所にいることが多いからだ。窓の下には赤い革張りの椅子が置いてあって、彼女はそこがお気に入り場所だった。

物憂げな表情、伏せられた目の睫は長く、肌が陶器のように白い。彼女は父である花園子爵の描く無表情の女の絵によく似ていた。彼女の身につける着物の洋花も、父の描いたものだ。紫地に、赤と白の薔薇。一見派手だが、晴子にはよく似合っていた。

彼女は窓の向こう、小雨の降る庭をぼんやりと見る。束髪から、はらりとひとすじ髪が額に落ちた。

それにそっと触れて戻し、ふうとため息ついて彼女は静かに呟く。

「……クマ……」

その微かな声は、雨音にとけて消えた。



（晴子なのに、雨、雨、雨。昔から雨ふらしの力は健在だわ）

バスに乗り、がたがたと揺られながら晴子は物思いに耽る。

（憂鬱な時は、いつも雨。助かる時もあるけれど）

明日は父の姉である伯母と出かける予定だった。

スペイン風邪で母を亡くした晴子にとっては、母親も同然のひと。

その後起きた関東大震災で家を失った花園家に家を用意してくれたのも彼女だった。彼女は画家であり、芸術学校で時々教鞭を執るだけの弟——父・宗二郎のことが心配で仕方ないらしい。

伯母にはまた父の不甲斐なさを嘆かれ、晴子の嫁ぎ先についてくどくどと言われるのだろう。伯母は由緒正しき京の公家の血筋としての誇りがあり、立派に相澤伯爵夫人として家のことを取り仕切っている。

（それなりに父の絵は売れていると思うのだけど）

父は今ふすま絵の依頼を受けて、寝食を忘れて没頭して

いる。母もおらず、年の離れた姉も嫁ぎ、家には父と晴子の二人きり。

(前はそこに……クマもいたのに)

晴子は去年の冬に亡くなった柴犬のクマのことを思い出した。母の死も、震災も、姉が嫁いだ時にも寄り添ってくれた、黒毛の柴犬。

クマのことを思うと、未だに寂しく、悲しい。小さな子が笑ったようなあの表情がとても愛しかった。尻尾を振りながら近づいてくるのを、抱きしめるのが好きだった。

(クマ、会いたいわ)

クマは母の実家から贈られたものだった。母は裕福な商家の生まれで、四番目の娘だった。縁続きになりたいという家からの縁談を断り、母は当時家に入りにしていた父を選んだ。芸術学校の教師だった父は依頼されて、応接間を飾る大きな絵を描いていたのだという。舞い散る花びらが、今にも動き出しそうな立派な絵だったそうだが、晴子はあまり覚えていなかった。

その大きな桜の絵も、母の育った立派な家も、地震で全て失われた。

晴子は今、父と四谷にある家に住んでいる。女学校には

バスで通っていた。バス停から離れた高台にある家だが、晴子は通学が苦ではなかった。

雨足が強くなる中、傘を差して黙々と坂道を登っていると、洋灯を手にした小さな影が前方に見えた。

「あれまあ！ お嬢様、バス停からお一人で帰ってくるなんて！」

小さな影は、花園家に古くから仕えているトメだった。トメは雪みたく白い髪をした老人で、七十を優に過ぎているとは思えないほど機敏に動いた。晴子や父よりずっと元気があつた。毎日晴子をバス停まで見送り、帰りは必ず迎えに来た。

「雨の加減で、時間がいつもと違ったみたいよ」

晴子は毎日トメが見送り、迎えに来るのを心配していた。晴子の家に続く道はなかなかの坂道と階段がある。高台にあるため、見晴らしは良かったけれど。

「こんな暗くて冷たい雨の日は、あの、あれが出ますよ。おしまさんがです」

家に続く長い階段は、雑木林に囲まれている。雨の日は陰鬱な雰囲気だった。

「お岩さんね。四谷怪談」

竹が多く生える雑木林は、クマと晴子の遊び場だった。茂みに隠れた晴子を、クマが見つけるとい遊びだ。

「そう、おしわさんです。こわやこわや」

そう言いながらトメは軽快に階段を登っていく。晴子はくすりと笑った。大の男ですら息の切れる道だったが、トメや子爵令嬢の晴子には慣れた道だった。女学校の友人が見たら驚くだろうな、と晴子は思う。

竹林を背景に立つ小さな家は、伯爵家が所有していたものだ。療養していた親族が亡くなって空き家になったので、借りることができたのだ。青々とした竹藪を背景に建つ家は、静かな場所を好む父にとってはうってつけだった。日当たりがよく、縁側は絵を乾かすための場所だった。それをたまに、クマが噛んで持って行ってしまうのだった。

「お父さま、ただいま帰りました」

膝をついて襖を開け、晴子は父に挨拶する。晴子の目の前には、畳の上いっぱい広げられた殴り書きの紙。背中を丸めて絵を描いていた父は、ひよこっと顔を上げた。

「晴子、雨はまだ降っているか」

「大粒の雨が降っています」

「紙が湿気ていかん。これはいかん」

父——宗二郎はぶつぶつと言った。

「今日はもうやめておきましょう、お父さま」

そう言う晴子の視線の先に、ある絵が目にとまった。

そこに描かれていたのはクマだった。元気だった頃のクマの、凜々しい横顔。

「お父さま、こちらにいたいてもよろしいですか？」

「ん？ ……ああ、かまわん」

父は言うど、また絵に向き合った。

「いかんな。死んでいるようだ、この桜は……」

ぼそりと聞こえたのが、晴子に対してなのか独り言なのかわからず、彼女はほんの少し立ち止まる。ややあって、また筆を動かす音がしたので恐らく独り言だったのでろうと思う。

毎日の父娘の会話はこんなものだ。

淡々と話すだけ、そこに感情の動きはない。笑いもなく、怒ることもない。

(いつの間にかこうなってしまったのだろう)

晴子はクマの絵を見ながら思う。

(そんなことはありません、と言うべきだった？　こんなに